重要伝統的建造物群保存地区を活用した教材作成のための事前学習の記録

―中山道妻籠宿，奈良井宿，木曾平沢に関する文献研究―

香川貴志 [*1]

General Articles and their Abstracts Regarding the Preservation District for Groups of Traditional Buildings in Tsumago-juku, Narai-juku and Kiso-Hirasawa on the NakasendoHistorical Main Route

KAGAWA Takashi

抄　録：本稿は，2020（令和2）年度の前期集中講義として実施した学部開設科目「地理学特講」と大学院開設科目「地理学特論Ⅰ」の事前学習の記録である。その内容は事前学習の概要，および付録として事前学習で扱った文献の要旨である。文献要旨は，対象地域に関する比較的新しい文献29編を対象としている。

キーワード：重要伝統的建造物群保存地区，文献研究，中山道，妻籠，奈良井，木曾平沢

Ⅰ．事前学習で文献研究に励む意義

筆者は毎年担当している地理学の現地フィールドワークをともなう授業（偶数年の学部授業「地理学特講」と大学院授業「地理学特論Ⅰ」，および奇数年の学部授業「地理学研究」と大学院授業「地理学特論Ⅱ」）において，入念な予備調査と事前学習の後に現地を訪問している。これらのうち事前学習は，単なる現地行動の説明でもなければ，往々にして退屈さを助長してしまう担当者が指定した書籍の輪読会でもない。それは，訪問予定地域に関する比較的新しい学術論文等の多種多様な文献を精読し，各文献のキーワード，そして厳しい制限字数のもとで文献要旨をまとめるというものである。

この方法は，筆者が本学に着任した1991年度以降の比較的早い時期から行ってきたものである。しかし，文献研究の成果を公刊して残す嚆矢となったのは2012年度後期の大学院授業の成果をまとめた香川（2013）である。この論文が「後に同じ地域を訪問する際に大変参考になる」と好評を博したため，2014年度以降の前期開講授業で扱った文献要旨を残していくことにした。

これらの全ては，授業実施の翌春に発行される『京都教育大学環境教育研究年報』に香川（2015a；2015b；2016；2017a；2017b；2018a；2018b；2019；2020）として継続的に掲載している。対象となる文献が多い年度は2つの論文に分割したこともある。対象地域は本稿の本文末尾の「引用・参考文献」欄と重複するのでここでは敢えて述べない。また，現地授業の備忘録もまとめている。これらに関しては2020年度の備忘録（香川，2021）の「引用・参考文献」欄に列挙しているた

[*1] 京都教育大学，同附属桃山小学校（併任）

め本稿では重複を避ける。

Ⅱ．対象文献

2020年度は年初来，とりわけ3月以降のCOVID-19（新型コロナウィルス感染症）拡大の影響もあり，本学の年度末と年度初めの予定が大きく狂った。新入生に対するオリエンテーションと受講ガイダンスが行えないまま5月下旬を迎え，新入生から不安と不満の声が漏れ聞こえ始めた。こうした厳しい状況のもと，2回生以上の授業もオンライン対応を余儀なくされた。こうした異様な状況での受講登録（数年前よりシステムを介しての作業）となったためか，受講登録者の出足は例年になく極端に低調で，最終的には学部学生9名と大学院学生2名の登録となった。

文献を精読してのキーワードと要旨の取りまとめは，これらの11名が分担して取り組むことになる。受講生数が概ね把握できたことを受けて，本稿の付録に記している訪問地域別の文献選考基準に従ってCiNiiでリストアップした文献は，全28件の半数に相当する14件がJ-STAGEやIR（機関リポジトリ）で無償ダウンロードできるに過ぎなかった。こうした矢先に学内の附属図書館がCOVID-19拡大抑止の観点から臨時休館となってしまい，文献収集に熟達していない学生たちの多くが文献を入手できない状況に追い込まれた。

そこで，2020年度は止むを得ずネットワークを介して無償ダウンロードできる文献に限って受講生に割り振った。残り14件，そして提出された文献要旨に改善の余地が多いもの5件，指定期日までに提出が得られなかった文献1件を加えた計20件については筆者が整えた。対象文献は，その後に新刊1件の追加をみて，全部で29件となった。追加された新刊文献については，課題を指定期日までに提出できなかった学生にペナルティとして担当させ，それを筆者が整えた。

各々の対象地域における文献の選定基準には若干の相違がある。基準については本稿の本文に続く付録に記した。なお，文献検索にはCiNiiを利用した。なお，CiNiiで検索する際に使用した検索語，および全体を通じて共通性が高い重要伝統的建造物群保存地区や伝建地区などは，付録に収録した各文献のキーワードから割愛している。

Ⅲ．事前学習にけるCOVID-19対応の工夫

2020年度はCOVID-19拡大抑止のため特別な対応を余儀なくされた。それを第1回事前学習会から順に第3回まで列記する。

3.1　第1回事前学習会の中止

当初は5月19日（土）の正午から15:10までの2コマを使って第1回事前学習会を実施する予定であった。しかし，対面授業の実施が出来なくなったため，教務システムを使ってオンラインで受講生に課題を与えた。この課題は，本来ならば第1回事前学習会で現地実習のアウトラインの説明と合わせて担当論文を決める予定を立てていた。教務システムを活用することで第1回事前学習会で予定していた内容を徹底することができた。この背景には，他の科目の多くも同様に教務システムを使った連絡をしていたことが学生たちの注意を促したことがあったと考えられ

る。このことは，いわゆるコロナ禍にあっても学生たちの向学心が衰えていなかったことの証左である一方，平時に教務システムがここまで有効に機能するか否かは不明である。

結局のところ第1回事前学習会は，　対面授業が可能な限りの対策を施して6月2日に始められたことを受けて6月13日（土）の正午から15:10に再設定した。しかし，順延された第1回事前学習会に向けての課題提出が直前まで低調であったため，急きょ中止として第2回事前学習会の内容を濃くするよう善後策を考えた。

3.2　第2回事前学習会―文献要旨の発表に代えた「修学旅行の栞」の作成―

教務課から配当されたB6教室は，受講生数からして「三密」を避けるには適切な収容の教室であった。とはいえ，各々の受講生が次々と入れ替わりつつ文献要旨の紹介を行う例年の方法は，マスク着用を義務付けていても避けるのが望ましいと思われた。そこで筆者は，前日の6月19日（金）に印刷製本して整えておいた「文献要旨集」を配布し，妻籠宿，奈良井宿，木曾平沢の3地域に関する文献要旨を各自で黙読するよう命じた。この文献要旨集は，本稿の付録と同じもので慎重な推敲を経ているため，比較的円滑に読めたはずである。

こうした精読作業に続けて，受講生各自が教育現場に奉職後，修学旅行の引率で今回と同じ中山道の3地域を訪問することになったと仮定のうえ，「『修学旅行の栞』を作る」というシミュレーション課題を課した。各々の地域についての制限字数は，タイトル20字以内を含めて400字以内とした。制限字数の根拠は，①「修学旅行の栞」における執筆の主役は児童生徒であり教員は各項目の扉を担当するケースが多いこと，②第2回事前学習会が2コマ（筆者による趣旨説明を除くと実質的に3時間）という時間的な制約，以上の2点に配慮したものである。

対象とする校種は，各自が就職を希望する校種とした。3地区それぞれが別の校種でも差し支えないとの指示も添えたが，全ての受講生が3地域とも同一校種で書き上げた。校種の内訳は，小学校5名，中学校4名，高等学校1名であった（受講登録をした者のうち1名は欠席）。中学校を対象とした受講生には元中学校教員の大学院生が含まれる。

課題に取り組む際の清書原稿用紙は，整理しやすいように罫線（マス目）の色を変え，妻籠宿を青，奈良井宿を赤，木曾平沢を緑にした。また，下書き用紙は各自5枚ずつを配布した。課題の仕上がりは総じて良好で，現地での観察ポイントの簡潔な解説，具体的な行動計画，現地に行く前に調べておく事項の宿題など，個性的な原稿案が得られた。すべての原稿案が分量でも85%（17行）を満たしており，全30点（3地域×10人）のうち最終行まで埋めたものが20点を数えた。原稿分量で評価を下げる対象は無く，記述内容と仕上がりを重視して評価した。

今回の取組は，特殊事情下での苦肉の策であったものの，従来は現地行動の初日に配布していた文献要旨集を事前学習会で配布できたこと，課題に取り組む際に自分以外の者がまとめた文献要旨を熟読できた点で，例年以上に事前学習の意義を高めることができた。平時での実施ができる次年度以降においても取り入れることが望ましい取組だといえよう。

ところで，第2回事前学習会は上述のように1名の受講生が欠席した。この学生は履修指導を終えておらず，前期の履修承認が得られていなかったため，本人に受講意志の確認を取ったうえで，当科目の以後の履修は認めないことにした。

3.3　第3回事前学習会

第3回事前学習会は，8月8日（土）の正午～13:30に実施予定であったが，8月初頭に学内でCOVID-19の陽性反応を示した者が出たため中止となった。配布を予定していた資料は各受講生に郵送した。詳細は別稿（香川　2021）に記すが，その後「現地行動の中止」要請が大学から出されて，その環境下で授業を実施する方向へ運ぶため，かなりの苦労を重ねることとなった。

Ⅳ．本稿の付録，現地行動についてまとめた小稿の紹介ーむすびに代えてー

本稿の「引用・参考文献」欄に続けて，第2回事前学習会で配布した文献要旨集から表紙を除いたものを本稿の付録として添えた。学会の発表要旨などで短いもの，写真を中心とした記事など，付録では収録していないものもあるが，人文科学的・社会科学的な近年の論考は大部分がカバーできているはずである。中山道の木曽谷にある重要伝統的建造物群保存地区を訪問する際には，少なからず参考にできると思われる。積極的な活用がなされれば幸いである。

また，2020年8月20日（木）～8月22日（土）に実施した現地行動と事後評価の詳細を本誌所収の別稿（香川　2021）にまとめた。念のためVR（バーチャルリアリティ）を活用したフィールドワークも準備したが，関係各位の並々ならぬご配慮のもと無事に現地フィールドワークを実施できた。もっとも，受講生の一人が前期で中途退学することとなったため，9月1日（火）からの業務開始に備えて現地実習への参加が叶わなかった。そのため，現地へ行けない場合に備えて準備したVR活用の課題を与えて単位認定した。この件についても上記の別稿で触れる。

謝辞

本稿をまとめるにあたり，長野県文化財保護協会（長野県教育委員会事務局文化財・生涯教育課文化財係）の柳沢美里様には，文献収集で大変お世話になりました。また，現地におけるフィールドワークでも多くの皆様方に多大な助力をいただきました。以上の皆様に心より御礼申し上げます。

引用・参考文献（本文の付録で扱った文献は除く）

香川貴志（2013）東日本大震災を受けての防災教育普及のための取組―さまざまな論考の整理と三陸地域での現地検証―.『京都教育大学紀要』，**123**，pp. 31-45.

香川貴志（2015a）阪神・淡路大震災20周年を機会として復興と防災・減災について考える（第1報）.『京都教育大学環境教育研究年報』，**23**，pp. 7-15.

香川貴志（2015b）阪神・淡路大震災20周年を機会として復興と防災・減災について考える（第2報）.『京都教育大学環境教育研究年報』，**23**，pp. 17-25.

香川貴志（2016）懐かしさを感じる街を歩くための事前学習の記録―門司港レトロ，豊後高田「昭和の町」，別府温泉郷を事例として―.『京都教育大学環境教育研究年報』，**24**，pp. 1-14.

香川貴志（2017a）飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習の記録（第1報）.『京都教育大学環境教育研究年報』，**25**，pp. 31-44.

香川貴志（2017b）飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習の記録（第 2 報）.『京都教育大学環境教育研究年報』, **25**, pp. 45-66.
香川貴志（2018a）三陸地域で防災・減災教育を学ぶ―その事前学習における文献研究―（第 1 報）.『京都教育大学環境教育研究年報』, **26**, pp. 25-37.
香川貴志（2018b）三陸地域で防災・減災教育を学ぶ―その事前学習における文献研究―（第 2 報）.『京都教育大学環境教育研究年報』, **26**, pp. 39-46.
香川貴志（2019）重要伝統的建造物群保存地区を学ぶための基礎文献と地形図読図課題―愛媛県西予市卯之町および喜多郡内子町の場合―.『京都教育大学環境教育研究年報』, **27**, pp. 53-64.
香川貴志（2020）福島県内の重要伝統的建造物群保存地区および会津若松に関する基礎文献とその要旨.『京都教育大学環境教育研究年報』, **28**, pp. 53-64.
香川貴志（2021）COVID-19 拡大抑止の環境下におけるフィールドワークの実践―中山道妻籠宿，奈良井宿，木曾平沢における 2020（令和 2）年「地理学特講」の実施とその工夫―.『京都教育大学環境教育研究年報』, **29**, pp. 13-28.

付録（事前学習で扱った文献の要旨）

★ COVID-19 対応のため，原則的に本学所蔵資料，J-STAGE や IR（機関リポジトリ）でダウンロード可能な文献の要旨は受講生が取りまとめたものを香川が推敲のうえ整え，それ以外のダウンロードができない文献は，原則として香川が他機関から取り寄せて要旨をまとめた。

「妻籠」で検索してヒットするもののうち，重要伝統的建造物群保存地区に関連が深いと考えられる 2000 年以降に発行された 5 頁以上（2019 年以降は 4 頁以上）の文献，および 1999 年以前の地理学関係雑誌に掲載された 5 頁以上の文献を全て掲出。ただし，内容が類似していると考えられる文献は新しい方を記載。なお，「妻籠」および「重要伝統的建造物群保存地区」はキーワードから割愛している。

Reference：荒山正彦（1999）．観光の経験（12）妻籠の記録―テレビ映像とガイドブック―．地理，**44**(9)，88-93.
Key Words：中山道，修景工事，テレビ映像，ガイドブック，観光資源，テーマパーク
Abstract：新しい交通ネットワークから外れ旧来の景観が色濃く残っていた中山道の妻籠を焦点化した記事である。妻籠は，文化財保護法の一部改正を受け修景工事が行われ，国内最初の重要伝統的建造物群保存地区の一つに指定された。ただ，修景は居住者への不便を一部で強いたことがテレビ映像から看取できる。国鉄企画のディスカバー・ジャパンも奏功し，妻籠は観光資源としてテーマパーク的な価値を得た。旅行ガイドブックを精査すると，当地についての記述内容の推移から地域の性格の変容を読み取ることができる。

Reference：石山千代・窪田亜矢・西村幸夫（2016）．集落・町並み保存地区における地域主体の調整システムの構築と調整課題の変遷に関する研究―妻籠宿における住民組織と保存審議会に着目して（1968 ～ 2003）―．都市計画論文集，**53**(3)，1239-1246.
Key Words：町並み保存，地域主体，調整システム，住民組織，組織運営，保存審議会

Abstract：本論文は，地域主体の仕組みがどういうプロセスで構築され，いかなる課題がそこで議論され，いかに調整されてきたかを中長期的かつ総合的に解明した論考である。景観，商売や営業，交通，売買，組織運営，その他，と様々な地域課題を分類し，1970年代から2000年代までを第一期，第二期，第三期と3つに大別し，それぞれの課題がいかに解決されてきたのかを図や表を用いつつ解説している。妻籠地域の居住者や関係者が地域主体となって丁寧に時間をかけながら解決していった様子を掌握できる。

Reference：石山千代・窪田亜矢・西村幸夫（2017）．集落・町並み保存地区における自主規範の法制化の過程に関する研究―妻籠宿における住民憲章の二段階法制化を事例として―．日本建築学会計画系論文集，**740**，2637-2647.

Key Words：町並み保存，自主規範，法制化，住民憲章

Abstract：この論文は，妻籠の町並み保存における自主規範の法制化過程を明らかにし，自主規範と法制化の関係性を探り，その意義と限界を考察したものである。当地では，妻籠地区が住民にとって精神的かつ経済的に重要であるという立場から，それを外資から守るために住民憲章記載事項の法的な裏付けが必要という意見があがった。この意見は様々な議論を経て，南木曽町主導の第一の法制化，国主導の第二の法制化につながった。しかし，住民憲章を遵守しながらの生活環境保全と観光振興の両立を図るのは容易ではない。

Reference：石山千代・窪田亜矢・西村幸夫（2018）．妻籠宿における住民憲章制定（昭和46年）に至る過程に関する研究―集落保存初動期における自主規範の創出―．都市計画論文集，**51**(3)，328-335.

Key Words：明文化，住民憲章，妻籠を愛する会，外部資本，観光客

Abstract：本論文は，慣習や不文律を明文化しない時代において，なぜ妻籠は住民憲章という明文化された規範を作ったのかを焦点化し，その経緯・過程・役割の解明を目指した研究である。「理」と「利」の融合のもと結成された「妻籠を愛する会」が核となり，外部資本や急増する観光客から集落を守るために作られた住民憲章は，法制化を待たずに住民からの意見や議論をまとめた自主規範である。この自主規範は，従前より妻籠地区で育まれ蓄積されてきた郷土愛（高い意識）が強固な基盤となったものに他ならない。

Reference：石山千代・窪田亜矢（2019）．観光客増加期における経済的恩恵の地域内での還元方策に関する研究―理と利のバランスに取り組んできた町並み保全地域に着目して―．日本観光研究学会全国大会学術論文集，**34**，281-284.

Key Words：観光客，町並み保全，経済的恩恵，合意形成，理と利，地域マネジメント

Abstract：本稿は，町並み保全とともに観光客が急増した妻籠宿で，観光客急増期より後の経済的恩恵の地域への還元について調べた研究である。当地域では町並み保全という「理」と観光客の消費で促される「利」のバランスへの配慮，経済的恩恵を受ける者（受益者）の金銭的・役務的貢献，各種の取組における受益者と非受益者の間の話し合いや合意形成，さらに駐車場収入の町並み保全事業への再投資が地域マネジメントに大きく貢献している。これらの基盤が観光客減少期の現在にあっても地域維持の源泉として働いている。

Reference：一杉美幸（2000）．復元思想の社会史（12）町並み保存の「観光人類学」．住宅建築，**298**，128-133.

Key Words：観光人類学，地域振興，保存条例，文化文政風俗絵巻之行列，ディスカバー・ジャパン，住民憲章

Abstract：観光人類学的視点で書かれた本稿は，過疎化に悩む妻籠宿を地域振興のために復元した過程や課題をまとめた労作である。復元の助走段階から保存条例が施行され，明治百年事業を機に現在まで続く文化文政

風俗絵巻之行列が始められた。国鉄のディスカバー・ジャパン企画でも注目を浴びた妻籠は，1975 年に最初の重伝建地区に指定される。また，観光開発で主体性を貫くため住民憲章も制定された。通過型から滞在型への脱皮など課題も山積しているが，ゲストとホスト双方の役割に配慮した対応が強く期待される。

Reference：木村竜也・羽生冬佳（2019）．町並み観光地における商業施設の特徴と変遷―1990 年以降の長野県妻籠宿・海野宿・奈良井宿を対象に―．日本観光研究学会全国大会学術論文集，**34**，225-228.
Key Words：町並み，景観保存，観光入込客，商業施設，業種構成
Abstract：本論文は，表題にある町並みの景観保存で著名な 3 つの宿場町を対象にして，1990 年から 2018 年までの観光入込客数の推移を調べ，その間の商業施設の変遷や業種構成を精査した研究である。3 つの宿場町のうち，妻籠宿では観光入込客数の減少とともに商業施設の減少が見られて業種構成に変化が乏しいが，海野宿と奈良井宿では観光入込客数が増加傾向にあり，商業施設が増加すると同時に，業種構成の多様化を確認できた。商店の店主は地元住民が多い妻籠宿や奈良井宿に対し，海野宿では外部や行政が目立った。

Reference：澤村　明（2010）．街並み保存の経済分析手法とその適用―木曽妻籠宿の 40 年を事例に―．新潟大学経済論集，**88**，19-32.
Key Words：街並み保存，観光，仮想市場評価法（CVM），経済価値，経済効果，費用便益分析，利と理
Abstract：本論文は，前半の経済分析のサーベイ，後半の街並み保存の経済効果の長期的分析の 2 者から構成される。そして論考では，街並み保存による観光需要の増大が地域経済にいかなる経済価値や経済効果をもたらすのかが追究されている。国内の事例研究の場合，CVM が多用されるが，長期的分析が難しい欠点の解消に本研究は挑んでいる。妻籠は 1980 年代半ばに馬篭の集客を凌駕して，著しい費用便益効果をあげるに至ったが，その背後には「利と理」の両立に長年腐心してきた地元関係者の絶え間ない努力が存在する。

Reference：谷沢　明（2006）．歴史・風土・文化を活かした地域づくりに関する研究（3）事例研究・木曽妻籠宿―地域づくりの志と課題―．愛知淑徳大学論集 現代社会学部・現代社会研究科篇，**11**，1-17.
Key Words：木曽，歴史的町並み，町並み保存，地域づくり，文化的観光，パフォーマンス，住民活動
Abstract：木曽妻籠宿では，住民による歴史的な町並みの保存で地域づくりに取り組んだ。1967（昭和 42）年には住民による「妻籠を愛する会」が結成され，率先して町並み保存に取り組み，その成功が多くの観光客を集客に貢献した。しかし，昭和末期には観光客が減少した。これに加え，住民の高齢化により農地や山林の維持管理が困難になったことから「商売のためのパフォーマンス」の増加を促した。妻籠に住み続けていくために居住者は今後どうすべきかが昨今の課題となっている。

Reference：二通直美（1977）．保存修景観光集落についての一考察―長野県妻籠宿・馬籠を例として―．学芸地理，**31**，28-50.
Key Words：保存修景，観光集落，宿場町，民宿，通過型観光地
Abstract：本研究は，古い街並みを復元・保存して観光資源とする集落を保存修景観光集落と名付け，長野県南木曾町妻籠と岐阜県中津川市馬籠を例にしたもので，そこでは民宿の聴取調査をもとに観光客の実態・観光地化による地元の変化・観光地化の要因を考察し，加えて将来の課題を整理・記述したものである。観光地化には大手資本ではなく，地元の融資と行政の協力に特徴を見出せる。現状では宿泊を伴わない通過型観光客が多いため，民宿を兼業している農家にとっては滞在型への移行が焦眉の課題となっている。

Reference：村松保枝・赤坂　信（2010）．近世及び近代における木曽山の保護施策での妻籠宿伝建地区内の

森林利用．ランドスケープ研究，**73**(5)，553-558.
Key Words：町並み保存，歴史的資源，文化的資源，現代住民
Abstract：本研究は，妻籠宿の伝建地区を取り巻く森林が人々とどのように関わり合いながら現在に至ったのかを解明したものである。町並み保存は，地域の歴史的，文化的資源を保存し活用しようとする取り組みで，こうした取り組みは1960年代後半，全国に先駆けて妻籠宿で始まったとされる。妻籠宿では，歴史的な建造物等だけでなく，建造物群の材料となった森林の保存が同時に図られた。しかし，現在の住民が森林との関わりや森林の価値を如何に評価しているのかの検証については，今後の追究課題として残された。

「木曽平沢」および「木曾平沢」で検索してヒットするもののうち，重要伝統的建造物群保存地区に関連が深いと考えられる5頁以上の文献を全て掲出。なお，「木曽平沢」「木曾平沢」および「重要伝統的建造物群保存地区」はキーワードから割愛している。

Reference：伊藤亜人・宇田川妙子（1985）．地場産業と村落社会―木曽平沢の漆器産業に関する社会人類学的報告―．東京大学教養学部人文科学科紀要，**82**，1-49.
Key Words：地場産業，漆器業，高度経済成長，村落社会，社会組織，
Abstract：本研究は，木曽平沢を事例に地場産業としての漆器業を焦点化し，高度経済成長の前後における製造や販売，雇用関係，社会組織の変化を通じて村落社会の構造や特質に深く切り込んだ長大な研究である。当地は隣接する奈良井よりも歴史的階層性が弱い反面，多くの社会組織（親族，同齢，同好，同世代など）が複雑に重層している。これらの社会組織は，高度経済成長期以前の「分業と一貫生産」による多品種少量生産が以後の製造・販売の兼業化に移行する中でも漆器業の秩序維持と発展に寄与することとなった。

Reference：荻村昭典（1955）．集団漆工地帯の実態―長野県木曾平沢漆器―．社会学評論，**5**(4)，94-99.
Key Words：手工的生産構造，尾州藩，半工半農，重要漆工集団地，応需生産，徒弟制度
Abstract：当地の漆工業は16世紀後半に起源を持つと伝えられ，長らく尾州藩の庇護のもと半工半農の形態で行われてきた。当地の漆器は主に江戸へ出荷されていたが，交通の利便性に恵まれず販路は限られていた。鉄道開通後に販路と生産の拡大が生じ．1949年には通産省により重要漆工集団地に認定された。しかし，生産のスタイルは応需生産が中心で，それゆえに職人は徒弟制度によって育成されている。また，生産工程の中でオヤカタ－コカタの関係が維持されるなど，封建的な生産構造が現在まで残っている。

Reference：塩尻市教育委員会（2020）．歴史的町並み保存の今（第3回）漆工町・木曾平沢の町並み―これからの町並み保存活用のあり方について―，文化財信濃，**47**(1)，23-27.
Key Words：漆工町，枝郷，雁行，アガモチ，塗蔵，力垂木形式，空き家問題
Abstract：木曽平沢は2006年に漆工町という初の分類で重要伝統的建造物群保存地区に指定された漆器産業集落で，隣接する奈良井の枝郷が起源である。集落内には中山道とそれに並行する通りがあり，湾曲する街路に面して三角形や台形の空閑地（アガモチ）を持つ切妻・平入の家屋が雁行する。漆器製造は主屋後方の二階建ての塗蔵で行う。その構造は力垂木形式という独特の様式で，温･湿度の維持が大切な漆工に好都合である。通りからは土間や主屋脇の通路で結ばれる。近年は空き家問題や観光対応など焦眉の課題も多い。

「奈良井」で検索してヒットするもののうち，重要伝統的建造物群保存地区に関連が深いと考えられる4頁以上の文献を掲出。なお，「奈良井」および「重要伝統的建造物群保存地区」はキーワードから割愛している。

Reference：荒井浩幸（2017）．旧宿場町に生きる―木曽・奈良井宿を事例に―．信濃［第３次］，**69**(1)，23-45.
Key Words：地域住民，合意形成，地域活性化，聞き取り調査，保存運動，ホスピタリティ
Abstract：地域住民への聞き取り調査を基にした本研究は，重伝建地区への指定前後を通じての保存運動や合意形成の過程を学ぶのに最適な仕上がりとなっている。必ずしも地域住民全員が保存運動に関わったわけではないものの，木曽谷が古くからもつホスピタリティ精神が地域活性化に大きく貢献した様子を随所から読み取れる。重伝建地区の持続的な維持活動は，地域社会における少子高齢化や「半空き家」を含む空き家問題など克服すべき課題が多いが，課題解決には本稿で解明された地域住民の意思の理解が不可欠であろう。

Reference：荒井浩幸（2019）．古い町並みに生きる女性の意思―長野県木曽路の奈良井宿，平沢集落の事例からの考察―．常民文化，**42**，1-33.
Key Words：伝統産業，漆器産業，核家族化，女性，よそ者
Abstract：この論文は，奈良井と平沢の２地域において，時代を経て変化していった漆器産業の衰退，核家族化による葬式やユイなど地域との関わりに着目し，そこで女性が担ってきた仕事の変化を追究した研究である。また，地域の伝統産業の次世代を担う若者が町を出ていくことに伴う漆器産業の衰退，地域の伝統が失われていく環境変化など，地域固有の課題に対して女性がどのように動いたのかを精査している。また斤人における「よそ者」も含めた新しい関係性を探り，今後の課題の導出を試みている。

Reference：五十嵐幸仁（2001）．地域の話題　時を超えて伝えられる町並み，奈良井宿．住宅金融月報，**598**，10-13.
Key Words：鳥居峠，出梁造，水場，中村邸資料館，保存条例，修理修景事業，歴史・文化継承住宅制度
Abstract：中山道鳥居峠の北側に位置する奈良井の景観維持を扱った本稿は，宿場町時代の面影が如何にして維持されてきたのかをまとめた論考である。出梁造と呼ばれる建築様式は，この地の景観の基層をなし，集落の水源としての水場は水場組合の管理のもと今なお現役である。景観維持の契機は現在の中村邸資料館の移築問題の勃発であった。その後の文化財保護法一部改正や保存条例の施行，重伝建地区に指定後の修理修景事業や防火事業，資金面での歴史・文化継承住宅制度に支えられ歴史的景観が保全されている。

Reference：牛谷直子・増井正哉・上野邦一（2004）．重要伝統的建造物群保存地区における現状変更に伴う景観変容に関する研究―楢川村奈良井重要伝統的建造物群保存地区を事例として―．日本建築学会計画系論文集，**69**(582)，81-86.
Key Words：地区指定，歴史的景観，修復，出梁造，建築材
Abstract：この研究では，「伝統的建造物群保存地区制度」での地区指定の設置が当該地区にいかなる影響を与えたのかを長野県の楢川村奈良井で調査したものである。奈良井は全国的にみて歴史的景観の修復の先進地区であるため，この研究を通して歴史的景観の継承のあり方や他の地域への敷衍も狙われている。本研究では，奈良井の建造物を三つの年代に分け，それらを四つの指標から分析している。建築物は，時代毎に建築材や構造が変化し，伝建保存制度により形状は残されたが本来とは異なった集落となってしまった。

Reference：大島規江（2003）．近世における奈良井の町並みと町組．日本建築学会計画系論文集，**68**(574)，77-81.
Key Words：近世，宿場町，宿絵図，町並み，町組
Abstract：本論文は，中山道の近世宿場町・奈良井の宿絵図を史資料として，当地の町並み（間口や間取りな

どの構造）および町組（上町）［京側］・中町・下町［江戸側］の各町の機能）の変化を江戸初期と後期で比較した精緻な研究である。町並みは中町の間口が広く経済的に強かったことが分かるが，江戸後期には各町とも戸数増加に伴って敷地が細分化され，機能的には平準化が進んだ。一方，各々の町組内では機能的差異が広がる傾向を見出せた。これらはいずれも江戸初期と江戸後期の宿絵図の比較検討を通じて読み取れる。

Reference：大島規江（2004）．伝統的建造物群保存地区における歴史的景観の変容―長野県楢川村奈良井を事例として―．日本建築学会計画系論文集，**69**(581)，61-66.
Key Words：歴史的景観，観光，空き家対策，地域住民
Abstract：奈良井は，近隣の木曽平沢と共に漆器産業を維持しながら，伝統的建築様式を残す歴史的町並みが観光資源として保存してきた。その保存活動は，修理・修景事業，防災事業，町づくり支援から成り立っている。とりわけ外観保存と調和的景観の創出は，地域の実状を精査し，それに合わせて実施された。また，「住みよい調和のとれた町づくり」を標榜しているため，空き家対策を町並み保存の重要課題として位置付けている。地域住民の要望には柔軟な対応をして，観光業と伝統的産業を守りつつ景観保存が行われている。

Reference：大島規江（2005）．伝統的建造物群保存地区における町並み保存に対する住民意識―長野県楢川村奈良井宿を事例として―．日本建築学会計画系論文集，**70**(590)，81-85.
Key Words：保存地区指定，規制強化，住民意識，地域文化，駐車規制
Abstract：この論文は，多くの重伝建地区における先行研究が景観や構造などを焦点化する傾向がある中で，当該地域で暮らす住民の意識を視程前と指定後で比較検討した力作である。本研究によって，指定前には規制強化によって不便が強いられるとの危惧や懸念があったものの，それが指定後には地域文化や伝統などの歴史への高い評価に転じたことが解明された。もっとも，自家用車の駐車規制で生活に不便を感じるなどの消極的な評価が一部で残っていることも指摘され，保存地区指定をめぐる難しさを垣間見ることもできる。

Reference：沢田多喜二（2007）．伝統的建造物群保存地区の成立と課題―妻籠宿・奈良井宿を中心として長野県塩尻市奈良井宿を事例として―．建築と社会，**88**(1020)，33-36.
Key Words：建築様式，明治百年記念事業，保存条例，後継者問題，登録有形文化財制度，景観法
Abstract：この論文では，対象としている2つの地区に共通する重要伝統的建造物群保存地区の概要，全国各地にみられる保存整備計画の特徴などの共通項に触れた後，長野県の明治百年記念事業により甦った宿場町時代の建築様式や景観について，妻籠と奈良井の実例を紹介している。両者とも保存条例が発端で，今では専門家・技術者の後継者問題が顕在化しているほど歴史が長い。こうした伝統的景観の維持には，登録有形文化財制度や景観法を有効活用した，居住者の理解のもとでの息の長い取組が不可欠である。

Reference：関　美里・増井正哉（2016）．観光地化と町並み及び祭礼行事の変容に関する研究―長野県塩尻市奈良井宿を事例として―．日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系，**56**，361-364.
Key Words：有形文化，無形文化，出梁造，ファサード，祭礼
Abstract：この論考は，観光地化により有形文化（建物ファサード）と無形文化（祭礼）が如何に変容をきたしたのかの解明を試みたものである。前者については，最新の調査時でも約70%に出梁造が残っているものの，主に店舗においてミセノマの土間への改変，格子の嵌め殺し窓やカウンターへの改装，建具の開放化などが生じていた。他方，後者については，お迎えやもてなしの床座から椅子座への移行，嵌め殺し窓やカウンターによる建具開放の不能化が確認できた。後者の変化は，前者の変容がきたしたものと考えられる。

Reference：司　修（1986）．奈良井宿にて．世界，**495**，12-15.
Key Words：旅籠，民宿，土産屋，木曾路
Abstract：画家である著者が木曽路の旅で投宿した民宿での夕食の際，同席した他の客との間で交わされた話題（主に第二次世界大戦をめぐる日本の功罪）をコアにしたエッセーであり，宿場町としての奈良井を正面から扱った学術記事ではない。ただ，かつての宿場の面影が文中に散在して感じられ，かつての旅籠の雰囲気が1980年代の民宿にも継承されている機能維持，理詰めの議論を交わした者たちが土産屋の前で楽し気に写真を撮り合う様子など，観光地としての顔をもつ奈良井の特徴が情緒的に描かれている。

Reference：栩本　敬（2019）．我が国の労務・人事管理のルーツを探る 第3部（第8回）江戸時代のサラリーマンの生活―寝覚の床を見学し，奈良井に到る（旅の5日目から6日目まで）―．先見労務管理，**57**(1620)，48-55.
Key Words：旅日記，出張復命書，鳥居峠，本陣，本居宣長，大日本天下四海画図
Abstract：この記事は，現代の出張復命書に相当する江戸期の旅日記をもとに，木曽路の福嶋（木曽福島）から鳥居峠を経て奈良井に至るまでの内容を現代語訳を添えて解説したものである。旅をしているのは旅日記の著者と妻子の3人で，社会的な地位は本稿だけでは想定の息を出ない。ただ，本陣での宿泊，駕籠の利用，旅の代金の支払い状況からすると相応の職階にあったと思われる。当時の旅の様子を知れると同時に，稿中に添えられた本居宣長による『大日本天下四海画図』の解説本記事の地図は資料として貴重である。

Reference：三觜康平・織戸歩実・宮里翔悟・川島和彦・濱津徹平（2011）．塩尻市奈良井重要伝統的建造物群保存地区における建築物等の現状変更に関する研究―行政・設計工・所有者の連携による成果（都市計画）―．日本建築学会関東支部研究報告集，**81**，335-338.
Key Words：現状変更，修理・修景・許可基準，主体連携，伝建研究会，生活環境
Abstract：本研究は，中山道の奈良井宿を対象に選び，行政・設計工・所有者の連携状況の精査を通じて修景の実態を都市計画の見地から探った論考である。相談を経た修理・修景基準は，景観保全を図りながら居住者の快適な生活環境が維持できるよう，敢えて曖昧さを残して設計されたもので，上記3者が主体連携のもとで関与する。設計士は伝建研究会で情報共有を図りつつ，事業の具体化に向けての現状変更プランの提案に至る。設計士と所有者の相談により相互の信頼関係が生まれ，文化財保護と生活環境の両立が実現する。

Reference：望月史郎・宮崎　清（1987）．奈良井宿における街具の評価と改善志向―歴史的環境における街具の研究（1）―．デザイン学研究，**1987**(58)，45-52.
Key Words：街具，生活優先型保存，非拘束型伝統志向
Abstract：本研究は，長野県奈良井宿の街道に設置されている道具・装置類（街具）に着目し，それらを地域住民がいかに評価し，いかなる改善への志向を持っているのかを，インタビューとアンケートにより解析・考察したものである。その結果，住民は伝統的様式の街具に高い評価を下していること，現存する街具についてもその改善の必要性を感じている事，生活優先型保存を基盤に非拘束的自主的改善を求めていること，さらに考慮すべきこととして街具の歴史的・地理的意匠とともに数量の重要性も上げていることが分かった。

Reference：八木国夫（2004）．紀行 夏の甲斐大泉と奈良井宿．LEMA，**477**，71-74.
Key Words：絵本の樹美術館，木曽路，奈良井千軒，藤屋，大宝寺，マリア地蔵
Abstract：本稿は，雑誌『LEMA』編集長の著者が甲斐大泉と奈良井宿を連続行程で日帰りトリップした紀行エッセーである。甲斐大泉の「絵本の樹美術館」を訪ねた著者は，かつて奈良井千軒と呼ばれた宿場町内にあ

る工芸店「藤屋」を館長から紹介される。甲斐路から木曽路に移動した著者は，「あぶらや」や「杉の森酒造」などに立ち寄りつつ「藤屋」に至り，お目当ての土産を手に店主との会話を楽しむ。店を辞して歩く宿場内には大宝寺の墓地にあるマリア地蔵も残り，この地の歴史の一端に触れたひとときが綴られる。

Reference：若泉真樹（2014）．真樹の俳句教室 奈良井宿のお茶壷道中．経営教育，**183**，50-54.
Key Words：お茶壷道中，中山道，木曽五木，長安寺，長棒駕籠，木曽の大橋
Abstract：本稿は，俳人である著者が中山道のお茶壷道中で句会を催すために訪れた際の抒情的なエッセーである。木曽五木が植えられた宿場入口から，著者らの一行は奈良井千軒と呼ばれた宿場内に入る。各所に立ち寄りつつ，お茶壷道中で使われる長棒駕籠を長安寺で観て，このイベントの最大の舞台となる奈良井宿の観光名所「木曾の大橋」に至る。現代によみがえった歴史的行事が観光イベントとなり，地域振興に一役買っている様子が読み取れる。稿中に散らばる俳句もスパイスとなって楽しく味わうことができる。